

## 講演録

## 近代日本における心理学の受容と制度化

サトウ タツヤ<sup>1)</sup>

## An acceptance and institutionalization of psychology in modern Japan

SATO Tatsuya

## 0 はじめに 本稿の目的

本稿の目的は拙著「日本における心理学の受容と展開（佐藤，2002）」に基づき，近代日本における心理学の受容と制度化について検討することにある。全く新しい学問が成長していくということは学問にとっては単なる発展史であるが，社会の中に地位を占めていくという意味では何らかの社会的イベントであると言える。以下ではこの「イベント」についていくつかの側面から検討していく。

まず最初に近代日本・心理学・受容・制度化ということを簡単に定義しておく。本稿での近代日本とは明治維新から太平洋戦争敗戦までの日本のことを指す。心理学とは，フェヒナーの精神物理学の技術やヴントの体系化によって発展した近代心理学のことを主として指す。受容とは排除でも自発でもないという意味である。外から入ってきたものを育てるなどして普及させていくことである。制度化とは制度を作ることであるが，公的な制度の中に心理学が一定の位置を占めることと，心理学者による自発的な制度の整備という2つの側面がある。前者には大学の中に心理学講座ができることなど，後者には学術誌や学会を整備することなどが含まれる。

1) 立命館大学文学部

心理学史に限らず歴史というものは現在の姿の理解のために行われるものであるから，まずここで本稿の前提となる認識を示しておく（表1）。筆者の立場としては，こうした現状を作り出した原因の一端を歴史に求めることができると思われるし，だからこそ歴史を検討する，ということになる。

表1 現在の日本の心理学に関する認識

- 
- 1（大学での）制度として定着し隆盛している。  
2（特に臨床心理学の）資格に関して混乱している。
- 

## 1 序論

## 1-1 本稿の基本的視角

次に，本稿の基本的視角を2つ示しておく。

まず，外部史的立場である。科学史家・クーン（1987）は科学史の立場を内部史と外部史に分けた上で，内部史的立場を「知識としての科学の実質に関心を寄せる」もの，外部史的立場を「より大きな文化内部における社会集団としての科学者の活動に関心をもち」ものであるとした。前者は学説史とも言え，学問の内部の興味の推移などを記述する志向である。それに対して後者は学問と社会との関係を重視する。また，学問の発展や定着は個人の超人的な活躍によるというよりは制度が整うことの方が重要だ

という考え方をとる。つまり、外部史的アプローチは、学説史的でもなければ英雄史的でもない、ということが言える。

基本的視角の2つめは科学社会的な視点をもっているということである。特に本稿では、学問と社会の関係を考える視点としてギボンズ(1997)のモード論という考え方に依拠している。モード論は科学社会学における知識生産について扱う議論であり、モードとは行動様式のことである。研究と実践、基礎と応用というような学問の2分法を措定するのではなく、学範(disciplineの訳)内の知識生産を目指すモードと、社会問題を解決するための知識生産を目指すモード、があると考えるのである。モード論については拙論(佐藤, 1998; 2000; 2001; 2002)を参照されたい。

### 1-2 日本における心理学前史

まず前史を検討していく。心理学が本当に日本の外にあったものなのか、自発的に日本に発生したものではないのか、ということである。詳細は略すが、日本が鎖国状態にあった江戸時代までは、今日の心理学に直接つながるような知識や学問体系は日本に存在しなかった。江戸後期の学者・鎌田鵬のように心や精神を経験的に捉えようとした人がいなかったわけではない。だが、それは当時の自然科学的な洋学に依拠しつつ心を考えようという側面はもっていたものの、彼や彼の弟子筋が心理学に興味をもつ

て受容のために何かをしたということはなかったようである。つまり、鎌田の興味とその後西洋から入ってきた心理学には連続はなく断絶していたのである。

では、心理学の日本での受容のルートはどのような感じだったであろうか。複数のルートがあった(表2)。

まず、心理学に関する内容を哲学の一部として学んだ一人に西周がいた。彼は江戸幕府の一員としてオランダに留学した際に実証的な哲学にふれ、その中で「没思古廬爾(ぼしころじ)」なるものを学んでいた。心理学である。西は明治維新後に明治政府の一員となり、様々な仕事をしたのだが、それ以前、1870(明治3)年頃に行われた講義「百学連環」で心理学について紹介していた。また、ヘヴンの“Mental Philosophy: Including the Intellect, Sensibilities and Will”を翻訳して『奚般氏著心理学』として出版した。この本は哲学の様々な訳語を造語したものとして著名であるが、心理学史として重要なのは、「心理学」が「Mental Philosophy」の訳語だったことである。西において「psychology」は「性理学」と訳されていた。性は性質の性、つまり「nature」であった。

2つ目としては、日本で解禁されたキリスト教の布教のために来日した宣教師たちが学校を作り、そこでキリスト教のみならず英語や学問を教える中で心理学に関連した内容を教える場合があった。特筆すべき例として新島襄が京都

表2 日本における心理学の受容ルート

主な人物と経緯	主な内容
1 西周のオランダ留学	精神哲学の紹介。「奚般 <sup>ヘヴン</sup> 氏著心理学」を翻訳出版
2 宣教師の日本布教	同志社英学校における「新知識」としての心理学
3 外山正一のアメリカ留学	東京大学(及び前身校)における「新知識」としての心理学
4 伊沢修二らのアメリカ留学	教師養成のための心理学
5 井上哲次郎のドイツ留学	哲学としての心理学
6 元良勇次郎のアメリカ留学	実証的な心理学

に設立したキリスト教系の同志社英学校で「性理学」や「心理学」の名称で講義が行われていたことである。

心理学の日本への受容のルート、3つ目は新知識一般としての心理学である。これはキリスト教や英語を学ぶ中で心理学を扱うことがあるというものであった。たとえば外山正一はアメリカに留学したが、専攻は化学であった。副専攻で哲学を修めたため帰国後に東大で教鞭をとり、そこで心理学についても講じたのであった。東大及びその前身校では初期から理系の学部などで心理学の本が読まれていたが、これは専門科目というよりは英語読解の訓練や新知識紹介という側面が強いものであった。また、同志社英学校では開校と同じ1875（明治8）年には心理学が（性理学という名称で）教えられていたようである。

心理学の日本への受容のルート、4つ目は師範教育、つまり教師養成の心理学である。明治政府は公教育の充実を重要政策としていたが、それには教師の育成が欠かせない。1875（明治8）年、伊沢修二と高嶺秀夫がそれぞれアメリカに留学し、帰国後は師範学校（現在の筑波大学）において心理学を重視したカリキュラムを作成した。

心理学の日本への受容のルート、5つ目は哲学である。東大の初代の哲学教授である井上哲次郎は1882（明治15）年にペインの心理学書を翻訳するなどしたが、1884（明治17）年からドイツに留学した。ドイツでは主として哲学を学んだが、井上自身はヴントの心理学にも極めて高い評価を与えていた。

このように、明治期になるといろいろな文脈で心理学が受容され始めたことが分かる。しかし、この時期には、いずれも他の領域の一部としての心理学であって、心理学そのものを学ぶための留学があったわけでもないし、心理学の教授が誕生したわけではない。また、重要なこ

とであるが、この時期までに日本で紹介していた心理学は、いわゆる近代心理学ではなかったと言える。日本に近代心理学を導入したのは元良勇次郎であり、彼のアメリカ留学の成果であった。そしてそれこそが6つ目のルートなのである。元良勇次郎と彼が導入した精神物理学については以下で述べたい。

## 2 本論

### 2 - 1 自立した心理学者・元良勇次郎 （1858-1912）とその人生

まず元良についてその人生を簡単に見てみよう。

元良は1858（安政5）年、今の兵庫県三田<sup>さんだ</sup>市に杉田姓で生まれた。武士階級の生まれであるが、結婚して元良家の養子となり士族から平民となり姓も変更したのである。元良は幕末の動乱期に英蘭塾という塾で川本幸民に教えを受けていた。カーペンターの『精神生理学の原理』（The Principles of mental physiology）やスマイルズの『自助論』（Self-help）に出会って読みふけていたと伝えられている。また元良は1874（明治7）年、キリスト教に入信し、新島襄が同志社英学校を創設するとその第一期生となった（1875）。授業ではヘヴンの「Mental Philosophy」が用いられていたようであった。1876（明治9）年、学農社（津田仙が設立）で教師となるために上京する。

1883（明治16）年、元良は結婚した上でアメリカに単身で留学する。最初はボストン大学にいたのだがうまく折り合わず、1885（明治18）年、ジョンズ・ホプキンス大学に転学しホールに師事する。彼が転学前にジョンズ・ホプキンス大学に出した手紙（同大に保存・1885年8月8日付）には「実験心理学」をやりたいと明確に記されており、その時点での元良が実験に基づく心理学＝近代心理学を学ぼうとして

いたことは確実である。また、彼が受講した科目の調査を行ったところ、ホールが開講している心理学や教育に関する授業は全て受講していたし、何より、1888（明治21）年にはホールと共著で圧覚に関する論文を発表している。しかし、元良の博士論文は「交換（Exchange）」に関する社会科学的なものであった。

## 2-2 元良勇次郎の精神物理学と心理学の制度化

博士号を取得して帰国した元良は1888（明治21）年、帝国大学にて精神物理学の講師となった。この時期からリズムの研究など実験的研究も始めた。1890（明治23）年には帝国大学（現・東大）教授となった。単に講義をすること、実際に研究をしたり研究のやり方を教えることは異なる。ここにおいて、日本の心理学界には自発的研究や教育のできる教授が誕生したと言えるのである。1893（明治26）年には大学の組織改編が行われ「心理学・倫理学・論理学」講座が2つ成立した。そして元良は第一講座の教授となったのである。なお、同第二講座には中島力造が就任した。心理学と倫理学に明確に分かれていたわけではなく、両者とも「心理学・倫理学・論理学」全般に興味をもって業績を重ねた。帰国後の元良は心理学の制度化を一身に背負っていたと言える。ただし、こうした制度化は元良が推進したと言い切れるわけではなく、元良を含む文学部（文科大学）の教員たちが心理学を含む様々な学問を制度化した中に心理学も位置づけられていたにすぎないと捉えておく必要もある。表3では、「帰国直後の元良が経験した心理学の制度化」となっているがそれは元良が主体的に押し進めた制度化なのかどうか不明だからである。

さらに心理学の公的制度化と言えるいくつかの出来事があった。

### 表3 帰国直後の元良が経験した心理学の制度化

1888（明治21）年	帝国大学にて精神物理学の講師となる。教育だけでなく実験研究も行う。
1890（明治23）年	帝国大学教授に就任。自発的研究や教育のできる教授の誕生。
1893（明治26）年	「心理学・倫理学・論理学」第一講座が作られその教授となる。

1900（明治33）年、松本亦太郎が東京高等師範学校教授に就任する。松本は元良の弟子であるがアメリカに私費で留学してラッドやスクリプチュアに師事し博士号を取得し助手に就任した。そこに公費留学の命が降り、その後ドイツではヴントに師事した。帰国後に東京高等師範学校教授となった。心理学の教授職は、東京高等師範学校（今の筑波大学）で、広い意味での教育心理学の担当として用意されたのであった。1901（明治34）年、帝国大学大学院生の塚原政次が児童心理学研究のために初の国費留学に出発した（帰国後は広島高等師範学校に着任予定）。ここでは、他の学問に比べるとかなり遅いこと、「心理学」ではなく「児童心理学」だったことに注目しておきたい。ここまで、元良、松本、塚原が留学からの帰国後に心理学関連職に就いたと紹介してきたので、彼らの留学スタイルなどについて比較しておく（表4）。

1903（明治36）年には東京帝大（現・東大）で独立家屋としての精神物理学実験室が設立された。実験室の設立や機材の準備については松本の尽力が大きかったと言える。そして、1904（明治37）年、東京帝大に心理学専修が成立した。哲学ではなく心理学の卒業論文を提出し、心理学の論文として評価されることが可能になったのである。翌年、第一期の心理学専修生が誕生する。この中には後の東京帝大教授・桑田芳蔵がいた。また、2・3期生には倉橋惣三や上野陽一など、後に心理学通俗講話会を作り『心理研究』を発刊するのに力を尽くした人達

がいた。

### 2 - 3 明治末期の心理学制度の広がり

次に、制度化の広がり

と混乱の時期に入っていく。まず、1906（明治39）年、東京帝大に次いで2番目に京都帝大に心理学講座が設立され松本が心理学講座教授となった。さらに東京帝大では1908（明治41）年、福来友吉が東京帝大助教授になった。大学での心理学担当者が3倍（といっても三人）に増えたわけである。福来の専門は催眠・臨床、当時の言葉では変態心理学であった。つまり、日本の心理学は極めて初期に、元良の心理学、松本の（広義の）教育心理学、福来の変態心理学、という三本立ての時期を迎えたのである。

さらに、心理学に関する自発的制度も整備されていく。自発的な制度とは心理学者たちが自分たちの判断で作っていく制度のことで、具体的には学会や学術誌のことである。少し時間は遡るが、1900（明治33）年、谷本富ら<sup>とまり</sup>が第4回の国際心理学会に参加した。国際的な心理学者の会に参加することで、世界の心理学との交流が始まったのである。1902（明治35）年には、元良が日本児童研究会の会長になった。児童の研究の総合的研究が必要となっており、その中心人物に心理学者が担がれたわけであるから、児童研究における心理学の重要性が分かる。そして1909（明治42）年、心理学通俗講話会が始まった。心理学以外の分野ではこの時期までに大学の学問は一般の人たちへの発信を行ってきた。たとえば東京数学物理学会などである。

こうした影響もあっただろうが、心理学通俗講話会の場合には東京帝大で成立した心理学専修の第2・3期生が中心になったということに特徴がある。倉橋惣三や上野陽一といった人たちである。自分たちが修めた学問を世間に発信したい、役にたきたいという気持ちの表れだったのではないだろうか。顧問は元良・松本・福来が務めていた。なお、この会は非常に好評であり、講演内容を出版した『心理学通俗講話』の売れ行きも好調であったことから、新しい形の雑誌を出版する話につながった。1912（大正元）年、『心理研究』が発刊されたのである。この雑誌は、読者の質問コーナーがあるなど完全な学術誌ではなかったとはいえ、日本人心理学者の講演や研究、外国の心理学説の翻訳や紹介が行われ、日本初の心理学の学術誌として恥じない内容であった。

このように、日本の心理学は公的制度としても、自発制度としても順調に発展を遂げていた。ところが、1912（大正元）年に元良が死去したことによって、事態が大きく動いた。元良の後任には1913（大正2）年、松本が東京帝大教授として就任した（京都帝大教授には野上俊夫が就任することになる）。だが、元良のもとにいた助教授・福来はというと同年東京帝大を休職に追い込まれてしまうことになる。詳しいことは分からないが、彼が催眠研究から「透視・念写」の研究に進んだことがその原因の一端であることは疑いない。彼は元良存命中から透視・念写の研究を行っていたのだが、その実験方法は控えめに言ってもあいまいなものにすぎず、批判が高まっていた。たとえば透視の実験

表4 元良、松本、塚原の留学の形式

氏名	期間	経費	帰国後の就職
元良勇次郎	1883 - 1885	私費	青山学院（私立） 帝国大学（東京帝大）
松本亦太郎	1896 - 1900	私費 公費	東京高等師範学校 京都帝大 東京帝大
塚原政次	1901 - 1903	公費	広島高等師範学校 広島文理大

において、目の前で何かを隠してそれを透視するというような単純で公明正大な方法は一度もとられたことが無かったのである。福来はそうした批判を全く受け付けず、透視・念写の存在に固執しており、元良の死後、『透視と念写』という著書を発表したことなどもあり、助教授職の休職を余儀なくされたのである（2年後に退職）。その直後に彼の後任は誰も採用されなかったため、変態心理学発展の芽はつまれてしまい、それは日本において臨床心理学が発展することを阻害したと考えられる。

東京帝大で助教授職にあった福来が休職となったことは公的制度的には大きな混乱ではあったが、卒業生を中心とした心理学の自発的制度化は進んでおり、そのことが公的制度における混乱の影響を最小限に抑えたといえる。

#### 2-4 大正期以降の大学など教育機関における制度の定着

さらに公的制度の広がりを目を向けてみよう。大学における心理学の展開である。

1917（大正6）年、桑田芳蔵が東京帝大助教となった。この時点で心理学は、松本による実験中心の心理学と桑田の民族心理学の2本立てとなる。京都帝大教授の野上は発達心理学などに理解があった。

1922（大正11）年、東北帝大法文学部に心理学講座が成立し、千葉胤成<sup>たねなり</sup>が教授となる。最初の学生は黒瀬艶子。日本人の心理学専攻生として最初の女子卒業生（1926）として記憶されて良い。1924（大正13）年、日本大学で心理学専攻課程が、翌年、九州帝大で心理学講座がそれぞれ成立した。また、1926（大正15）年には当時の日本の植民地だった朝鮮半島に京城帝大法文学部で心理学講座が開かれた。日本の心理学は1920年代以降、それまでの東京帝大・京都帝大の二校体制を脱し、制度的に広がったのである。当時の心理学のカリキュラムを

調べてみると、「概説」「外書講読」「演習」「実験実習」が4つの柱になっていた。また、「概説」「外書講読」「演習」の内容は大学や時期によって変動していたが、「実験実習」の内容に大きな変動はなかった。授業をすることは制度として定まっていたものの、その科目名や内容は心理学者たちが自発的に決定するものであった。その中に「実験実習」が常に存在するのであるからその重要性はかなり大きなものとして認識されていたと言える。

次に大学以外の教育機関における心理学の展開を見てみよう。

1900（明治33）年、高等学校（旧制）で心理学を教えることが決まった。「心理及論理」という科目名であるから、心理か論理の専任教授が配置されることになった。前述のように1905（明治38）年、広島高等師範学校で心理学教授が誕生した（塚原政次）。1918（大正7）年、警察講習所で心理学担当の講師配置。1921（大正10）年には陸軍学校で心理学担当の教授が誕生した。こうした展開は、大学の心理学卒業生にポストを作り出したという意味でも重要であった。高等学校の教授職は心理学専攻卒業生の重要な就職先として機能することになり、そこでいくつもの研究が行われたのである。一例として、後に京城帝大教授となる黒田亮が新潟高校教授として「心理及論理」を教え、多くの心理学的研究をしていた。ただし、この職は心理学者か論理学者のどちらか一人が居ればよいということだった（たとえば、哲学者・西田幾多郎がその若き日に第四高等学校（現・金沢大学）にて「心理及論理」を担当して心理学も教えていた）。

#### 2-5 自発的制度：学術誌の整備と学会の成立

再び自発的制度の話に戻ろう。前述の『心理研究』に前後して、心理学に関する学術雑誌が

どのように変遷してきたのかについて大枠で捉えておく（表5）。現在のように学会があるから雑誌もあるという形式ではないことに留意されたい。また、以下の8誌を含む関連雑誌の刊行状況を発刊・廃刊年と共に表した図を付録として掲載するので参照されたい。

表5 心理学関連雑誌の整備

- |   |                                                            |
|---|------------------------------------------------------------|
| 1 | 総合学術誌・教育関係誌依存の時代（1880『六合雑誌』；1887『哲学会雑誌』）                   |
| 2 | 心理学準専門誌の誕生（1912『心理研究』）                                     |
| 3 | 心理学専門誌分化の時代（1917『変態心理』；1919『日本心理学雑誌』）                      |
| 4 | 心理学専門学会誌の誕生（1926『心理学研究』）                                   |
| 5 | 欧文心理学専門誌の誕生（1930『京城心理学彙報』；1933『Tohoku Psychologica Folia』） |

まず、総合学術誌・教育関係誌依存の時代。（1880（明治13）年発刊の『六合雑誌』や1887（明治20）年発刊の『哲学会雑誌』（後に『哲学雑誌』）に心理学関連の記事や論文が発表されていた時期があった。特に元良勇次郎などはこの両誌に多くの論考を発表している。

次に、心理学専門誌の誕生（1912（大正元）年刊の『心理研究』）。この雑誌は完全な専門誌というよりは、準専門誌という位置づけであるが、心理学者にとって自分たちで制度化したホームグラウンドが成立したことの意義は大きいと言える。

そして、心理学専門誌分化の時代。『心理研究』に加え1917（大正6）年に中村古峡が『変態心理』を発刊。また、1919（大正8）年には京都帝大の心理学関係者を中心に専門的学術誌としての『日本心理学雑誌』が発刊された（後に東京帝大から再刊行される）。ただし、この時期の分化の流れはそれほど成功しなかった。そこで、『心理研究』と『日本心理学雑誌』が統合されることになり、1926（大正15）年

に『心理学研究』が発刊されることになった。この雑誌は日本心理学会成立後に同学会の学会誌となる（1927）。

最後に、欧文心理学専門誌の誕生の時期がある。1930（昭和5）年、京城帝大の黒田を中心に『京城心理学彙報』が1933（昭和8）年には東北帝大から『Tohoku Psychologica Folia』が発刊され、それぞれ日本の研究を海外に発信する役割を担っていた。また、久保良英など国際学術誌の編集者となる心理学者も現れた。

では、心理学に関する学会はどのように成立したのだろうか。既に一部は触れたことだが簡単に見てみたい。1926（大正15）年、ある意味で競合状態にあった準学術誌の『心理研究』と純学術誌『心理学雑誌』が統合して『心理学研究』を発刊することになった。しかも、この統合は単なる雑誌の統合に終わらずさらに一歩進んで1927（昭和2）年には学術組織としての日本心理学会が成立することになった。また、この年には関西で応用的な心理学に携わっていた心理学者たちが、京都帝大の野上俊夫を会長に関西応用心理学会を作った。これ以後、日本心理学会は2年に1度、関西応用心理学会は1年に2度、学術集会を持つことになる。集まる範囲が狭いとは言え、後者の方が活発に集会を持っているという感じがする。1931（昭和6）年には、東京の心理学者を中心にした応用心理学会が、1933（昭和8）年には動物心理学会がそれぞれ成立した。

## 2-6 昭和戦前期における混乱

昭和の初期までに心理学者たちは、大学・高校などの公的な制度に一定の地位を占めることになり、学術雑誌や学会という自発的制度を整備するに至った。ここでは力をつけた心理学者たちが、公的な制度を改変しようとした動きについて検討してみたい。1927（昭和2）年、各高等学校に当時の金額で500円が実験室整備用

に措置されたのであるが、これは第一回日本心理学会での決議がもとになっていた。1931（昭和6）年、文部省科学研究費に心理学（者）が応募可能となったのだが、これも高等学校の心理学者たちの要望を聞いて桑田や塚原が尽力した結果であった。心理学において、この時期までに実践的な活動力をもった自治的制度が成り立っていたと言える。

1939（昭和14）年には、高等学校の「心理」の教科書をゲシュタルト心理学一色にしようという運動が起こった。これは公的制度をめぐる紛争であったが、実際には心理学者の内部に世代間の亀裂が生じていたことが原因であろう。リーダーと目された小野島右左雄は当時40歳代。1つ上の世代 - 東京帝大の桑田などの世代 - と争ったのであるが、結果として桑田らに有利な解決がなされた。制度の上でさまざまな駆け引きや争いが起きたのは、良くも悪くも制度自体が安定期に入った証拠だと捉えることができるだろう。

1932（昭和7）年に<sup>ろこうきょう</sup>盧溝橋事件によって日中間に戦端が開かれた。国民の生活が軍事色に染まっていくと、心理学者の活動は沈滞期に入った。当時の日本は軍事立国を目指していた。こうした国策に近かったのは2つの領域の心理学であった。1つは軍隊、もう1つは教育である。前者においては兵隊の知能や航空機への適性の検査。そして効率的な訓練ということになる。後者においては、当時の教育の理念を押し進めるような教育学説を唱えたり、各民族の知能の測定と比較をすることになる。国家総動員体制下では、国民全体の適性を調べるための適性検査の整備に心理学が必要とされるに至った。厚生省の職業紹介所にも心理学者が必要とされるようになった。また、戦況が長引き悪化すると<sup>しょうい</sup>傷痍軍人のリハビリテーションの問題が起きた。こうした問題にも心理学者は取り組んでいた。心理学（者）たちは、国策自体に関わった

り、戦略に関わったりはしなかったし、最前線で兵隊に取られるということも少なかったようであるが（大学生の動員はもちろんあった）、それでも一定の有用性を認められて戦前の国家体制を運営する側に立たされていたとすることができる。

これより先、1941（昭和16）年には心理学関連学会が合同して「心理学会」が成立、その部会はほとんど「応用的」なものとなった。具体的には基礎・教育・産業・司法・傷兵保護・軍事の6つの部会が置かれた。しかし、それにもかかわらず1943（昭和18）年までには事実上心理学の学問的研究は行えないようになっていった。国家的事業（の悪化）の前には心理学者の自発的制度はほとんど力を持たなかったと言える。日本心理学会の『心理学研究』は事実上休刊。そして1945（昭和20）年の敗戦を迎えたのである。

### 3 結論

#### 3 - 1 本稿のまとめ

本稿で述べたことを踏まえたうえで、さらにいくつかの資料を使用しつつまとめておく。

1 1935（昭和10）年の『心理学者名簿』には500人弱の心理学者（心理学卒業生）がリストアップされていた。卒業生が社会で活躍したことは、大学での心理学制度化の成果だと思われる。

2 臨床心理学には当初は特権的地位があったにもかかわらず大正期には弱体化したと言える。

3 大正期以降、産業・軍事の応用心理学は盛んになり、戦時下ではますます盛んになった。

4 教育（に関する）心理学は明治期から継続的に行われており、戦時下も同様であった。

5 維新後の政府が他の学問ほど積極的に心

理学を制度に定着しようとしていた形跡はなかった。たとえば、戦前の帝国大学のいくつかに心理学講座は設置されたが、文学部のない所に心理学が制度化された例はなかった。戦前期に政府や体制の側から心理学自体が評価されていたということはなかったようである。

7 それにもかかわらず戦前期までに心理学は主として大学制度の中に着実に根をおろしていたとも言える。

8 今回は心理学の研究者の側から制度を考えてみたが、海外の学説が日本の心理学にどのように影響したかという研究や、心理学を学んだ学生の側からの研究もさらに必要だと思われる。

### 3 - 2 学範としての心理学の展開

本稿では主に制度ということに着目して話をしてきたので、学説の進展についてあまりふれられなかった。そこで簡単ではあるが、最後に内部史的観点から学説をまとめておく。

江戸時代には心理学はなく、明治前期は非実証的な心理学が知識として普及した。そして、明治の中期以降、元良により実証的心理学がもたらされた。精神物理学及びそれを実践に活かそうとした教育実践志向の心理学も芽生えた。福来による変態心理学が、変態心理学そのもの問題ではなく、担当者の問題によって挫折したのはその後の日本の心理学の展開にとって大きな痛手だったと思われる。続く大正期は松本による「知能心理学」という業績がある。あくまで実験にこだわりつつ現場的な研究を行う産業心理学や軍隊心理学が発展した。この時期、京都帝大の野上は発達心理学を、東京帝大助教授の桑田は民族心理学をそれぞれ研究していた。昭和初期になるとゲシュタルト心理学の影響を受け知覚心理学が発展した。戦時下では教育や軍隊に関する心理学に従事する人が増えた。臨床心理学については（福来の事件もあっ

て）大学ではあまり発展しえなかった。

内部史的観点をとりつつも少し視点を変えて、心理学のあり方を見てみると、まず、戦前期までの心理学は哲学の一領域だったということが重要である。そして、それにもかかわらず、実験実習が外されていた専攻プログラムは存在しなかったということも分かっている。さらに、卒業生を中心に教育にかかわる心理学者は常に存在し続けたということも言える。学範に忠実に、そして社会との接点を持つというスタイル。これは応用というよりもギボンスのいうモーダ的なあり方ではないかと思われる。モードとは社会問題解決型のモードであるが、それを可能にするのは学範内興味喚起型のモードであるモードが着実に育っていたということを示しているものである。解決すべき問題に心理学という学範からどう切り込んでいくのか、ということこそが重要なのであるから。

### 3 - 3 心理学の受容や展開の特徴

内部史的視点も見た上でのまとめを行う。以下では心理学の受容や展開の特徴について多少抽象的にまとめておく。

まず、学問受容期の影響要因を見てみよう（表6）。

表6 学問受容期の影響要因

学問一般	日本心理学の場合
社会における重要性の認識	高等教育や哲学・教師養成における重要性の認識
類似する考え方の存在	類似する考え方の存在無し

日本の心理学の場合、高等教育や哲学・教師養成における重要性の認識があったことがプラスに働き、類似する考え方の存在が無かったことが妨害要因の発生を防いだと言えるかもしれない。

次に展開期。学問受容期の影響要因を見てみ

よう(表7)。

表7 展開期における影響要因

学問一般	日本心理学の場合
当該学問のその後の進展	留学による知識の随時的な伝達・・・継続的
社会からの期待需要	教育・産業の現場からの期待・・・継続的
内在する考え方との融合志向	儒学や仏教との融合への志向・・・散発的

留学による知識の随時的な伝達は継続的に行われ、新しい知識や技術を次々に伝えることが可能だった。教育・産業の現場からの期待も継続的になされ、心理学の卒業生に活躍の場を与えた。もちろん、心理学者たちが自発的に学問全体を売り込んでいった「心理学通俗講話会」のような制度のことを忘れるわけにはいかない。一方、本稿ではあまり触れなかったが、心理学の土着化とでもいうべき流れ、すなわち、儒学や仏教との融合への志向は散発的にしか行われず、これも日本の心理学を世界の心理学から孤立させない要因となった(一方では独自の心理学の成立を妨げた)。

最後に学問の社会的展開を可能にする要因を考えてみよう(表8)。

表8 学問の社会的展開を可能にする要因

学問一般	日本心理学の場合
教育制度の確立による人材の輩出	帝国大学での心理学研究室の成立
カリキュラム整備	実験実習などの規範化(問題解決力の付与)
卒業者(専修者)の自覚	心理学専修の成立によるアイデンティティ

教育制度の確立による人材の輩出は主として帝国大学での心理学研究室の成立という形で行われ、カリキュラム整備がなされたのである(問題解決力の付与)。ここで重要なのはおそら

く実験実習が学範の中心だったことである。それでもう1つ卒業者(専修者)の自覚がある。心理学専修の成立による学生の心理学アイデンティティ確立が心理学を社会に展開させる力になった可能性は大いにある。

### 3-4 なぜ心理学史を研究するのか、学ぶのか

日本は明治維新という未曾有の社会改革を行った。その改革の中には教育改革も含まれており、高等教育の制度には心理学が組み込まれた。制度として成立した心理学は様々な研究や教育を行い、卒業生は社会に出ていった。また、自分たちで自発的な制度を作って社会と関係を持ち、あるいは相互交流による研鑽<sup>けんざん</sup>を行ったのである。ただし、戦時下のように、国家全体がやや「反社会的」な目標をもって政策を遂行した時に、それについて批判する力は弱かったと言える。現在、日本の心理学は様々な事柄について社会との接点を持つように社会から期待されている。こういう時には、その社会全体のあり方について、反省的に捉える必要があるのではないかと思われる。制度について、目先の善悪を判断するのではなく、その制度がよって立つ社会や国家のあり方についても検討する必要があるのである。現在、心理学は学校という公的の制度においては隆盛しつつ、資格という(自発的な)制度ではやや混乱している。こうした時期だからこそ、日本の心理学のあり方を振り返ることは大きな意味があるだろう。歴史自身は今の問題に直接答えを出すものではない。しかし、私たちにとって有用なヒントはたくさんあると思われる。

### 付 記

本稿は、2002(平成14)年9月27日に筆者が日本心理学会第66回大会において行った小



- 創造 丸善ライブラリー)。
- Kuhn, S. 1977 *The essential tension : selected studies in scientific tradition and change*. Chicago; London: University Chicago Press. (安孫子・佐野訳 本質的緊張 - 科学における伝統と革新みすず書房)
- 佐藤達哉 1998 進展する「心理学と社会の関係」モード論からみた心理学 人文学報(東京都立大学), 288, 153 - 177.(この論文はサトウ・渡邊・尾見 2000 心理学論の誕生 北大路書房 に再録されている)
- サトウタツヤ 2001 モード論: その意義と対人援助科学領域への拡張 立命館人間科学研究, 2, 3 - 9。
- サトウタツヤ 2002 モード・現場心理学・質的研究; 心理学にとっての起爆力 下山・子安(編) 心理学の新しいかたち 誠信書房
- 佐藤達哉 2002 日本における心理学の受容と展開 北大路書房
- (2002.12.17. 受理)